＜様式＞

<table>
<tr><td>学校名</td><td>山形市立第一中学校
山形市松波三丁目１番１５号
TEL:622-0121　FAX:633-9797</td><td>校　長</td><td>須崎　智志</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>研究主任</td><td>伊藤　直貴</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒の育成（３年次）」
～探究的な学習の充実を通して～</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">本校では、昨年「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒の育成（２年次)」～探究的な授業づくりを通して～」の研究主題のもと、校内研究を行ってきた。
昨年度、探究学習に取り組んだ３年生は「課題設定力」、「情報収集力」、「整理・分析力」、「まとめ・表現する力」のどの項目についても力がついたと実感している。その生徒達は、中学校卒業後の探究学習についても意欲を示している。３年間の探究学習に対する満足度も高く、本校での研究の成果がうかがえる結果となった。また、教員同士が授業を参観し合う「みてみて Day」の取り組みに対して生徒にアンケートを取ると、「もっと自分の頑張りを見てほしい」、「わからないところを教えてほしい」という声が寄せられた。教員の授業力向上の取り組みが生徒の承認欲求を満たしたり、自己肯定感を高めたりすることにもつながっている。探究学習における外部人材の活用や生徒同士、教員と生徒など様々な人との関わりが、生徒の学ぶ意欲に大きく関わると考えられる。
「総合的な学習の時間」における探究学習は今年度で４年目になる。昨年度は、３年間の探究学習の成果を３年生が１・２年生に発表することを通して、本校の探究モデルを示すことができた。また、山形大学や東北芸術工科大学など外部機関との連携を図り、生徒の探究意欲をより深めることができた。今年度はこれまでの成果をもとに、本校の探究学習サイクルの確立に向けた学習計画のもと、より深い学びにつなげていきたい。また、教員同士が授業を参観し合いながら、探究的な授業づくりを目指すとともに、生徒の良いところを認めながら、さらに自己肯定感を高めていきたい。</td></tr>
<tr><td>研究の目標</td><td colspan="3">本研究は、本校の学校目標「ふるさとに誇りをもち　学び続ける人間の育成」の具現化のために、「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒を育成すること」を目標とする。そのために、「総合的な学習の時間」に探究学習に取り組んでいく。また、各教科で育成した資質・能力をもとに「総合的な学習の時間」に「探究」を進める一方で、そこで培った資質・能力を活かして各教科での学びを実生活に結びつけ、それぞれの学習による相乗効果をねらっていきたい。</td></tr>
</table>

研究の内容	（１）「総合的な学習の時間」における探究学習の推進 ・山形大学と連携しながら探究学習を進める。 ・課題を解決、検証するための実験や調査など生徒自身が動く場面の設定。 ・異学年交流の場面を設け、互いに学び合う場面を設定する。 ・３年間の見通しをもって、適切な時期に講話や講座を設定し、生徒の探究活動を深める。 （２）各教科における探究的な授業づくり ・生徒が主体となる課題設定→展開→振り返り・まとめのサイクルを意識した単元づくりを行う。 ・「みてみて Week」を設定し、教科や学年関係なくお互いの授業を参観し、教員相互で授業づくりを行う機会を設ける。 （３）教科の学びと総合的な学習の時間の学びを相互に活用した資質の育成
研究の方法	１　研究推進委員会を開催し、理論研究とスケジュールの調整を図る。 ・毎週水曜日に研究推進委員会を開催する。 ・外部機関との調整を図る。 ・教育課程を調整する。 ２　教科部会を通して授業改善に取り組む。 週１回の時間割の中に組み込み、研究主題に即し、かつ教科の本質に迫る授業構想や指導案検討等を行う。 第１回　校内研修会　令和８年　７月３１日（金） 第２回　校内授業研究会（総合的な学習の時間）　令和８年　９月　８日（火） 第３回　総合的な学習の時間　授業公開　令和８年　１１月１９日（木） 第４回　校内研修会（まとめの会）　令和９年　２月２２日（月） ４　各自の授業実践 「みてみて Week」を実施する。 ５　校内研究のまとめ ２月末に成果と課題について考察し、次年度以降の校内研究につなげる。
研究の計画	校内研究の年間計画 ４月　校内研究会の方向性について・開催時期について（検討） ５月　今年度の研究の方向性について（共通理解）　各自の授業実践 ７月　校内研修会（探究的な授業づくりについて）　「みてみて Week」 ９月　校内授業研究会（総合的な学習の時間） １１月　総合的な学習の時間　授業公開 ２月　研究のまとめ作成 ２月末　校内研究まとめの会

＜様式＞

学校名	山形市立第二中学校 山形市西崎６２ TEL 644-3902　Fax 645-8253	校　長	加藤　ゆかり
		研究主任	二藤部 由美
研究主題	自分の考えをもち、根拠を明らかにして表現する力の育成（２年次） ～ＩＣＴ等の活用による学習の個別最適化と協働的な学びを通して～		
研究主題設定の理由	昨年度は、研究の概要を教員間で共有しながら、「根拠を明らかにして表現する生徒」の育成を目指して研究を進めてきた。その結果、生徒の課題に向き合う姿勢が高まり、教科横断的な思考や学びのつながりを意識した活動が定着してきた。また、生活状況調査の結果からは、ICT 活用の効果を実感する生徒の割合が向上しており、ICT を介したコミュニケーションが学習の活性化につながっていることがうかがえる。「ICT が便利だから使う」という段階から「学びを深めるための道具」として認識され始めていると考えられる。 一方で、「自分の考えを発表する機会では自分の考えがうまく伝わるように資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している」という項目の回答に二極化が見られるように、発表が得意な生徒は増えているものの、苦手な生徒はより苦手意識を強めている可能性がある。また、高校入試（特色選抜）においても自分の考えを相手にわかりやすく伝えていく力が求められており、相手意識をもった表現力の育成が今後の課題である。 以上のことから、探究的な学び、協働的な学びを一層重視し、自分の考えを根拠とともにわかりやすく伝える力を育成していく必要がある。昨年度の研究成果を踏まえ、単元構造を見通した課題づくりや ICT 機器を含めた生徒の表現活動を支える表現方法の手立てをさらに充実させることを目指して研究を進めたいと考える。		
研究の目標	本研究は、本校の教育目標である「未来に向かって主体的に生きぬく生徒の育成」の実現を目指し、生徒一人一人が自分の考えを根拠とともにわかりやすく表現できる力の育成を目標とする。その際、学習指導要領が重視する「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の視点に立ち、各教科等における生徒の資質・能力を確実に定着させていきたい。そのためには生徒が自ら目標を設定したり、学習方法を選択したりしながら、主体的・協働的な学びができる単元づくりが必要であると考える。 また、ICTを「学びを深めるための道具」として効果的に活用し、資料作成や発表、意見交流などの表現活動を支える手立てを充実させる。これらの取り組みを通して、発表の得意・不得意にかかわらず、すべての生徒が自分の考えを相手意識をもって伝えられる表現力の育成につなげていく。 目指す生徒の姿 （１）自分の学習状況を根拠として、学びを調整しながら、自立的、意欲的に学びに向かう生徒 （２）「自分」「物事」「人」に向き合い、相手意識をもって自分の考えや思いを表現できる生徒 （３）教科や生活の中で得た知識や経験を根拠として活用し、課題解決に向かうことのできる生徒		

研究の視点	（１）自分の考えをもち、根拠を明らかにして学びたくなる単元づくり ・単元を通して「考え→根拠→表現」の循環が生じるように構成する。 ・単元を貫く課題を設定し、学習の見通しをもたせるとともに、学習の軸として機能させる。 ・インプット→活動→表現の流れを意図的に設計する。 ・ICT を含む多様な表現方法を保障し、表現の選択肢を広げる。 （２）思考・判断・表現する場面の設定 ・根拠を収集・比較・再検討する場面を意図的に位置づける。 ・学習過程で見方や考え方が更新される場面を構成する。 ・思考ツール等を活用し、生徒がもっている根拠を整理・分析・吟味する場面を設定する。 ・協働的な対話を通して、考えを深めたり再構築したりする場面をつくる。 ・表現のテンプレートを活用し、表現の構造化を図る。
研究の内容・方法	（１）研究授業の実施 ・研究テーマ及び、研究の視点に沿った一人一授業を行う。 ・１学期に各教科部会にわかれて、外部指導者を交えた事前検討会を行う。 ・事前検討会を踏まえ、２学期に授業を公開する。複数クラスを公開し、教科部会の教員を中心にできるだけ多くの方で参観する。（必要に応じて外部指導者を招聘する。）授業後、参観シートを授業者に提出する。 （２）実践の共有 ・教科で行った研究授業の成果と課題を職員会議等で報告し、教科を越えて互いの授業実践に活かせるような機会を作る。 （３）研究紀要の作成 ・研究授業を含む、教科ごとの実践をまとめ、来年度へつなぐ。
研究の計画	4月　今年度の研究内容の確認 6月　事前研の資料準備(全員) 7月7日　外部指導者を招聘して事前研をする。 夏季休業中　外部講師の講話･ワークショップ 生徒の実態、研究テーマのとらえ等について共有、再確認。 2学期　指導案(目標、研究テーマとの関連、単元計画、本時)を作成し、1人1授業を行い、参観する。 1～2月　研究のまとめ、研究紀要作成 3月　研究紀要発行(データ)

＜様式＞

学校名	山形市立第三中学校 山形市双葉町二丁目１－１０ TEL 644-3903　FAX 645-8492	校　長	星川　仁一
		研究主任	村山　一樹

研究主題	自らの可能性に挑戦し続ける生徒の育成　（３年次） ～深い学びに向かう学習活動の工夫～
研究主題設定の理由	本校は「自主自立」の精神のもとに設立された。その精神を目指すために、「創造的で心豊かなたくましい人間の育成」を学校教育目標として掲げ、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な他者と協働しながら豊かな心を育てること、そして、生徒が学ぶことの意義を実感できる授業を通して、一人一人の力を伸ばすことを目指してきた。 今年度、本校では育成を目指す生徒の資質・能力として、以下の５つの力の育成に取り組んでいる。 ①　自らの生き方、将来を考える力 ②　自ら判断し主体的に行動する力 ③　目標実現にむけて、粘り強く取り組む力 ④　自分の思いや考えを確実に伝える力 ⑤　協働し課題解決する力 これらの資質・能力を育成することによって、答えのない問いや即時解決が困難な課題にも粘り強く挑戦し、将来にわたって学び続ける力を育てたいという願いから、この研究主題を設定した。
昨年度の研究から	昨年度は、事前研の実施により参観者の授業理解が深まり、事後研の討議が活発化するなど、授業研究の質の向上が見られた。また、指導案上に教科として達成すべき目標と、本時で育成したい資質・能力に関する目標を併記したことで、教科の到達点のみならず、本時の授業が資質・能力の育成にどのようにつながるかについて考える視点が広がった。さらに、各教科で資質・能力の育成に向けた具体的な手立てをまとめたアクションプランを作成し、「１人１実践」を掲げたことで、積極的な授業実践が多数報告され、教員の主体的な取り組みが進んだ。年度末アンケートにおいても、「校内研究が資質能力の育成につながった」と回答した割合が８３％となり、前年度を上回る成果が見られた。 一方で、アンケート結果からは、「自分の授業を見てもらった」「ほかの先生の授業を参観した」回数が年間０～２回の教員が全体の８０％と多く、授業を見合い、学び合う機会が十分に確保されていないという課題が明らかとなった。このことは、資質・能力の育成に関する共通理解の深化や、教科横断的な視点の共有、生徒の姿の見取りの精度向上に向けて、改善の余地があると考えられる。 これらの成果と課題を踏まえ、今年度は、教員が互いの授業を一緒に考え、見合い、見てもらう機会を意図的に増やし、「協働」を通して授業改善の視点を共有していく。また、その協働を土台として、一人ひとりの教員が新たな授業改善に取り組む「挑戦」を重ね、生徒の資質・能力の育成につながる授業づくりを全校体制で推進していく。

研究の目標	（1） 生徒個人が自らの可能性に挑戦する学習活動を通して、目標実現にむけて、粘り強く取り組む力を育てる。(資質能力②・③) （2） グループでの活動や意見を発表する活動を通して、根拠を明確にしながら、自分の考えや思いを相手に確実に伝える力や、多様な他者と協働して課題解決する力を育てる。(資質能力④・⑤) （3） 総合的な学習の時間における探究学習を軸に、地域や社会に対して主体的に行動しようとする力や、自らの生き方や将来について考える力を育てる。(資質能力①・②)
研究の内容	（1） 教科による取り組み(アクションプラン)の活用 ・育成を目指す５つの資質能力について、日々の授業でどの力をどの場面でどのような手段で伸ばすことができるかを教科で考える。 ・設定した取り組みを校内授業研や個人の実践の指導案に取り入れ、実践する。 （2） 実践の計画・実施・振り返り ・育成を目指す５つの資質能力について、各個人が今年度の重点項目を決め、日々の授業や個人の実践を実施する。 ・個人で授業実践を行う場合は、教科部会や学年部会を活用し、参観者を募るようにする。 （3） 指導案への明示 ・授業における生徒のＢ規準の姿を明確化し、規準に満たない生徒への手立てを具体化する。 ・育成を目指す５つの資質能力について、本時の授業の中で特に伸ばしたい力を設定し、育成に向けた具体的な手立てを明示する。 （4） 日常の授業を参観し合う期間の設定 ・教員同士が授業を見合う機会を設け、学校全体で資質・能力の育成について共有し合えるようにする。 ・参観を通して得られた気づきを持ち寄り、授業改善に向けて協働を促す環境を整える。
研究の方法	(1)毎週金曜日に研究推進委員会を行い、校内の研究について吟味する。 (2)教科部会を週 1 回の時間割の中に組み込み、研究主題に即し、かつ教科の本質に迫る授業構想や教科研究授業の検討を行う。 (3)７月に校内授業研を実施する。指導主事を招聘して助言・指導をいただく。 (4)長期休業中に研修の機会を設け、研究主題の実現に向けた学びを深める。 (5)研究のまとめとして、校内授業研の成果と課題や、今年度各自が研究主題に即して挑戦した実践についてまとめる。
研究の計画	４月　研究計画提案、校内授業研授業者決定 ５月　アクションプランの見直し、個人研究計画立案 ７月　校内授業研究会 ９～１２月　教科授業研究会・特別支援授業研究会 １月末まで　教科のまとめ、研究紀要原稿締め切り ２～３月　研究紀要完成　次年度に向けて

＜様式＞

学校名	山形市立第四中学校 山形市花楯二丁目１０番４８号 TEL　622-3904　　FAX　633-9801	校　長	前田　洋光
		研究主任	樋口　里見

研究主題	**関わり合いを通して学びを深め合う生徒の育成（２年次）**
研究主題設定の理由	昨年度は、「関わりを通して学びを深める生徒の育成」の目指し、２つの視点（①生徒が自分の考えを持ち、伝える工夫、②様々な関わりの中で新たに視野を広げる手立て）を掲げて研究を行った。 一人一授業を行いお互いの授業を見合う中で、生徒にはそれぞれ思いや考えがあることや、それを伝えた時に相手に好意的に受け止められると授業が活性化し、生徒はもっと学び合いたいという思いを持つことが分かった。しかし、学校生活における生徒の関わりの様子から、思いを受け止める態度の育成や、考えを伝え合う過程でどのような手立てを行えば、個人の視野を広げたり知識を深めたりできるのかを考えることへの課題も出てきた。 今年度は、「関わりを通して学びを深める生徒の育成（２年次）」を研究主題とし、昨年度共有した２つの視点を同様に掲げて、研究を進めていく。本校の生徒の実態を理解し、四中生それぞれが自分の思いを大切にし、学校生活の仲間と関わり合う体験の中で多角的な見方や考え方に気づき、学びを深めることができるように指導していきたい。各教科の本質にせまる学習に導くために、各教科部会や研究推進委員会を適宜行い、研究を進めていき、その上で、各部会での気づきや学びを職員全体で共有し、よりよい指導の在り方を考えていきたい。
研究の目標	**◆学校教育目標「立志　建学　貢献」** ○誇りと志をもち、自立する四中生（立志） ○深く考え、学びを表現し合う四中生（建学） ○互いを認め、未来を切りひらく四中生（貢献） ・学校教育目標を踏まえ、以下の学びに向かう生徒の姿を目指す。 関わり合いの中を通して学びを深める生徒 学びの深まり ① 主体的に学びに向かい、自ら課題を設定して考えを形成する姿。 ② 既得の知識・技能、思考力・判断力・表現力を総合的に活用して、多様な他者と協働、比較、再構成する姿。 ③ 多様な見方・考え方をもとに、よりよい課題の解決策を見出したり、考えを広げたりする姿。

研究内容	今年度は以下のように研修を推進する。 学習指導案：「指導について」の項目に、「学校研究との関わり」として目指す生徒の姿に近づくための手立てを記載し、授業者のねらいを明確にする。 事後研究会：目指す生徒の姿に近づけていたかを、授業中の生徒の具体的な姿を取り上げて話し合う。そして、次に生かせる指導のありかたを学ぶ。
研究の方法	１．研究推進委員会を開き、研究についての話し合いを持ち、研究をリードする。 ２．教科部会を行い、研究主題に即し教科の本質に迫る単元構成や学習指導案の検討等を行い、授業改善を図る。 ３．校内授業研究会を年２回実施する。第１回目（６月実施予定）は、今年度の研究内容に基づく提案授業を行い、全職員で参観して今年度の校内研究について共通理解を図る。第２回目（１１月実施予定）は第１回目の授業研究会をもとに改善した授業研究会を行う。 ４．一人一授業を計画的に実施する。教科部会では、単元についての構想を練り合い、今年度の研究に沿って授業を行う。また、担当教科を中心に積極的に授業を参観し、学びを深めていく。
研究の計画	５月　今年度の研究についての提案 ６月　第１回授業研究会 ６月～２学期末　授業実践「一人一授業」の提案 １１月　第２回授業研究会 １月下旬　２回の授業研究会や各教科の成果と課題を受け、来年度の学校研究の検討（研究推進委員会） ２月下旬　今年度の研究のまとめと来年度の学校研究の方向性の提案

＜様式＞

学校名	山形市立第五中学校 山形市薬師町一丁目１４番１０号 TEL: 622 - 0559　FAX: 633 - 9802	校　長	庄司　雅和
		研究主任	大築　郷

研究主題	「学び続け、挑み続ける生徒の育成」（２年次）
研究主題設定の理由	令和７年度は、「学び続け、挑み続ける生徒の育成（１年次）～自立トライアングルの３つの力を発揮して～」の研究主題の下、研究を進めてきた。本校の生徒の発揮したい資質・能力を「対話力」「挑む力」「適応力」の３つに設定し、その３つの力の中心に生徒の「自立」を据えた「自立トライアングル」として図示し、生徒と教職員で共有して学校研究に取り組んだ。 授業づくりにおいては、生徒が考え挑み続けることができる授業を目指し、わかったつもりになる一斉指導からの脱却を図り、生徒に委ねる場面の設定、工夫に挑戦した。そうすることで挑み続ける生徒を育成できるのではないだろうかと考え研究主題を設定した。また、山形市教育委員会より委嘱研究を受け、「学びの意義や価値を実感する授業づくり」をテーマに各教科で取り組んだ。そして、生徒が学ぶ価値について考えるため、生徒会活動と連携し、教師と生徒が「学ぶ価値」について対話をする機会を設定し、生徒の声を起点として授業改善に向けた実践を行った。 研究の成果としては、以下の２点を挙げる。 ・「対話力」「挑む力」「適応力」の「３つの力」は生徒と教職員の共通言語として浸透した。授業の場面だけなく、学校行事や学級活動など様々な学校生活の場面で、生徒の資質・能力の育成につながった。 ・授業において、生徒が自身の学びを客観視する機会が増えた。生徒がこれまでの学習や他教科との関連付けを行う場面が見られ、学んだことを生かし、学び続ける姿勢の育成につながった。 一方で、課題としては以下の点を挙げる。 ・生徒アンケートから、生徒が「３つの力」を発揮できた場面には偏りが見られた。授業では、「対話力」と「挑む力」を発揮できたと感じる生徒が多い一方で、「適応力」については発揮できたと捉える生徒の割合は低かった。「適応力」を中心に、「３つの力」を発揮する場面の明確化を図ることが求められる。 令和８年度は、研究主題を継続して「自立トライアングル」の「３つの力」の明確化を図り、教職員と生徒で共有する。また、研究推進委員会と各教科部会の接続を強化し、授業改善に組織的に取り組んでいく。これにより、学びを深めていく生徒の姿を目指していきたい。
研究の目標	**令和８年度における目指す生徒の姿** ・自ら学び、考えを深めることに楽しさを感じる生徒 ・共に歩む仲間を尊重し、互いによりよい関係を築こうとする生徒 ・自他のいのちを尊び、目標に向かいたゆまず努力できる生徒

育成したい資質・能力

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
知識･技能を獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより定着を図る。 対話をとおして、自分にはない考えを他者から獲得するために、知識・技能を体系化し活用できるようにする。	知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考力。 多様な考えを受けとめ、それらの共通点や相違点を理解し、自己決定できる判断力。 他者との対話をとおして、自らの考えをより深められる力。	主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の学習を調整する力。 多様な考えを尊重し、あらゆる状況に適応しながら、様々なことに挑み続けようとする力。

研究の内容

資質・能力を育む単元構成
各教科において、単元で育てたい力を明確にし、生徒が学ぶ価値を実感できる課題を設定する。 生徒自身が学習状況を把握し、学習課題の決定や学習方法の選択ができるように、主体的な学びを促す単元を構成する。

学びをつなげる振り返り	対話的な学び合いの工夫	指導と評価の一体化
既習事項、他教科、実社会との関連など、学んだことがつながるような工夫をする。 振り返りを通して、学びの自己理解ができるようにする。	生徒同士の協働、教職員や先哲の考え方を手がかりに考える事等をとおして、生徒が自己の考えを広げ深められるようにする。	学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。 学習評価をもとに教育課程の改善・充実を図るというＰＤＣＡサイクルを確立する。

研究の方法

（１）研究の組織について

研究推進委員会を週１回開催し、研究についての話し合いの場を設定する。また、教科部会を週１回開催し、教科の本質に迫る単元構想や指導案の検討等を行い、授業改善に取り組む。研究推進委員会と教科部会の連携を密にし、研究主題にそった授業改善の実践を行う。

（２）校内研修会について

校内研修会を年２回開催する。その中で、研究主題にそった授業改善のために、各教科の実践を共有する機会を設ける。また、教員の必要なテーマの自主的研修会を年に数回設定し、実施する。

（３）校内授業研究会について

校内授業研究会を年２回実施する。第１回目は全教員が研究主題に即した授業実践を行い、大学等の先生から助言を得て、授業改善に努める。第２回目は３教科から今年度の研究内容に基づく提案授業を行う。

（４）１教科１授業の実践について

各教科において、年間１回の以上の研究授業を計画的に実施する。教科部会において、単元についての構想を練り合い、今年度の研究に沿った授業実践を行う。

（５）生徒の声を起点とした授業づくりについて

年間２回の生徒アンケートを実施し、年間での生徒の変容を分析しながら、研究の成果と課題を明らかにする。また、生徒と教員が授業づくりについて対話をする場を設ける。生徒アンケートや生徒との対話の内容をもとに、授業改善に取り組む。

研究の計画

４月　３日（金）	職員会議（今年度の校内研究について）
７月１３日（月）	第１回授業研究会
７月上旬	生徒アンケート実施①
７月２８日（火）	第１回校内研修会
７月～１２月	１教科１授業の検討・実施
１１月　５日（木）	第２回授業研究会
１２月上旬	生徒アンケート実施②
２月上旬	各教科で研究紀要作成
２月２４日（水）	第２回校内研修会（今年度の研究のまとめと来年度の校内研究について）
３月中旬	研究紀要発行

＜様式＞

学校名	山形市立第六中学校	校　長	栗田　和真
		研究主任	石川　亜由美

研究主題	学びに気づき、考え、探究する生徒の育成（２年次） ～教科における探究力の共有～
研究主題設定の理由	本校は学校教育目標に「気づき、考え、進んで実行する生徒の育成」を掲げ、「まなぶ力」「かかわる力」「やりぬく力」の育成を学校経営の重点としている。特に「まなぶ力」では、個別最適かつ協働的な学びを通して、自らの学びを創る生徒を育成するために、教科経営において、主体的・対話的で深い学びと、探究的な学習の実現に向けた研究を推進してきた。 令和７年度は、令和６年度までの研究成果をもとに『探究する姿の明確化』をテーマに掲げて研究を行った。各教科では、探究する姿を明確にするために、それぞれの教科で目指す探究する姿とはどのような姿かを教科部会で話し合い、教科経営案に明記した。また、日々の授業や１人１実践の実施によって、探究的な学習をどのように設定できるのかを教員間で共有しあった。総合的な学習の時間では、ミニ探究を実施して探究的な学習をどのようにして構築していくかを模索した。 昨年度の成果と課題を客観的に探るために、年度末に教員と生徒にそれぞれアンケートを実施した。教員アンケートでは「課題の吟味と明示」、「協働的な学びの場を工夫し、根拠を明確にして説明すること」の意識度が高いことが分かった。これは、令和６年度までの研究主題で強化したことが継続的に意識できていたと考えられる。逆に、「生徒による課題設定・解決計画の立案での個別最適な学びの実現」は他の質問内容に比べて意識度が低かった。その理由として、教師自身が「個別最適な学び」をイメージしづらいと考えられるので、校内研修会などでそのイメージを共有する必要がある。また、生徒アンケートでは、「協働的な学びの場で根拠を明確にして意見を述べること」や「学習効果を得られるようにＩＣＴ機器を活用すること」で意識度が高かった。さらに、どの項目でも生徒の意識度は教員の意識度より高く、教員との意識度の差が見られる。生徒は、教員が考えている以上に学びを意識していると考えられる。 そこで、「何ができるようになるか」「どう使えるか」を生徒とも共有し、教科の資質・能力（３観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう態度」）の育成、学びに向かう力・人間性等の積み上げをより強固なものにしていく。さらに、本年度も、令和の日本型学校教育の理念を追求するため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」で深い学びの実現を目指し、探究的な学習の研究に励んでいく。 以上のことから、授業によって身に付けていきたい『探究していく力＝探究力』を教員だけではなく生徒とも共有し、それを意識して授業を行うことによって、探究力を身に付けられたと生徒自身の実感につなげることができるのではないか。また、「各教科の教科の本質における生徒の探究する姿(目指す姿)」に近づけられるのではないかと考えた。
研究の	**探究力の共有を図り、それを磨くための授業を実践する。** （「探究力」とは、「各教科の教科の本質における生徒の探究する姿」に迫る力を指すものとする。）

目標	
研究の内容	**≪教科部会で≫** （１）教科経営案で明示した「教科の本質における生徒の探究する姿」をもとに、各単元や授業で身に付けてほしい探究力を設定する。 （２）身に付けてほしい探究力を生徒と共有して授業を行い、１人１実践と参観、事前・事後研究によって生徒が探究力を身に付けられたと実感することができているのかを検証する。 **≪日々の授業で≫** （１）教科の資質・能力（３観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう態度」）の確実な習得を目指す中で、身に付けられる探究力は何かを生徒と共有する。 （２）授業によって身に付けた探究力を発揮できる場面や発揮する姿を見取り、生徒と共有する。 （３）授業において身に付けることができた探究力を表現させ、生徒自らがそれを自覚できる場面を設定しながら、指導の個別化と学習の個性化の方法を模索する。 （４）仲間と一緒に思考する場面や対話により考えを深め合える協働的な学びの場を工夫し、根拠を明確にして意見を述べる力を育成する。
研究の方法	（１）週１回の研究推進委員会で、研究について話し合って原案を作成し、その原案をもとに、教科主任を中心に同一歩調で研究に取り組んでいく。時間割に教科部会を組み込み、１人１実践と参観、事前・事後研究を実施しやすくする。 （２）探究 ICT 部と連携し、探究 ICT 部が推進する総合的な学習の時間で行う探究学習（ミニ探究）と、本研究で行う各教科での探究学習との整合性を取る。 （３）研究主題に迫る授業を、<u>１人１回以上</u>計画し実践する。また、担当教科や他教科を複数回参観して、日々の授業に生かしていく。校内授業研究会（大研）では、教科担当者全員で提案して授業づくりに関わり、授業後に生徒インタビューと事後研究会を行う。 （４）教科の授業で、研究主題にせまるための具体的な方策を設定して実践する。 ①単元における身に付けてほしい探究力を生徒と共有する。 ②単元の見通しをもたせ、生徒自身で課題や解決方法を選択する（自分で考えて判断する）場面を設定する。 ②１時間や単元の適切な場面でまとめと振り返りを行い、生徒自身が自分の学びをアウトプットする（表現する）時間を設定し、生徒が身に付けた探究力を見取る。 （５）教員と生徒にアンケートを実施し、成果と課題を把握する。
研究の計画	≪年度初め≫ ・校務分担・教材の決定、授業者（該当教科）の決定（4 月 1 日　教科部会①） ・教科経営案、年間計画、評価規準・基準、教科ガイダンス資料の確認（4 月 2 日　教科部会②） ・今年度の研究内容と計画を研究主任より提案（4 月 7 日　職員会議） ≪１学期≫ ・教科経営案の手直し ・１学期分の評価計画・基準の確認、指導案検討（該当教科）、１人１実践の計画 ・**<u>校内授業研究会（大研）６月５日(金)</u>** 予定教科：１コマで３教科（国語・理科・音楽） ・１人１実践（授業研を行う教員以外も、１回は指導略案を作成、学年団・教科担当者に配布し、授業を行う。２月初旬までを目安に各自設定。） ≪夏休み≫ ・「教科で培う探究力（仮）」についての校内研修会（7 月 30 日） ・２学期分の評価計画・基準の確認、一人一実践の確認 ≪２学期≫ ・１人１実践（１学期から引き続き） ・教員用アンケートの実施（12 月中旬） ≪冬休み≫ ・３学期分の評価計画・基準の確認 ・今年度の各教科の成果と課題のまとめ ≪３学期≫

	・生徒用アンケートの実施（2 月上旬） ・今年度の研究の成果と課題提案（研究紀要の原稿作成） ・研究紀要の発行（3 月） ＜その他＞ ・今年度も、研究推進委員会、学習指導部、探究・ＩＣＴ推進部、総合的な学習担当、自主的に実践を試みて頂ける先生方が中心となって進める。

＜様式＞

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立第七中学校
山形市天神町２５２０番地
TEL　６８４－７５５５　FAX　６８４－６４５９</td><td>校　長</td><td>須藤　由美子</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>花輪　靖子</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">思考をつなげ、深く学び合う生徒の育成
～「深い学び」の具体化を目指して～</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">令和７年度は「主体的に学び続ける生徒の育成」という主題を継続した４年次研究として、一律一斉型の研究ではなく、研究主題へ迫るサブテーマを各自の興味関心に基づいて選び、研究を進めた。サブテーマは、「生徒が見方・考え方を働かせる授業」「生徒の疑問や思いが引き出される授業」「生徒の疑問や問いが深まる授業」の３つとした。また、教科部会と並行して、各自で選んだサブテーマ毎にチームを作り、年間を通して教科横断的に授業参観や授業研究会の交流を深めた。一人ひとりが主体的に授業作りを行い、互いに学び合いながら個人研究を進め、「主体的に学び続ける生徒の育成」の最終年次として締めくくることができた。
最終年次のまとめの中で、次の研究へのポイントとして次の二つのことが浮かび上がった。
一つ目は、主体的な学びへのアプローチとして「生徒の疑問や思い」が有効であったが、それをいかに「つなげる」かが大切であるということだ。必要感を感じる話し合いの場面、教科の本質に迫るための疑問や思い、既習を意識した課題作りなどの重要性が挙げられた。
二つ目は、教科の本質に関わる「深い学びの姿」を教師が明確に持って授業作りをすることの大切さである。「見方・考え方を働かせる」授業を意識した結果、目指す生徒の姿の曖昧な捉えが、主体的な学びの姿のズレや単元構成の迷いの原因になることが見えてきた。
また、教育課程企画特別部会（令和７年９月２５日）では、次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方として、「（主体的で対話的で）深い学びの実装」とあり、「深い学び」について、改めて整理する方向性が示されている。
これらを踏まえて、新たな研究主題を「思考をつなげ、深く学び合う生徒の育成～『深い学び』の具体化を目指して～」とし、１年次として研究を進めていく。初年度と言うことで、まずは、各自、そして教科として、「深い学びの生徒の姿とは、こうなのではないか」「そのために思考をつなげる手立てはこうなのではないか」と、授業での生徒の具体の姿を語れることを目指す１年としたい。</td></tr>
<tr><td>研究の目標</td><td colspan="3">授業実践、授業参観、学習指導要領を整理しながらの教科部会、外部の研修会参加等を通して、新しい研究主題の入口として、初年度「深い学び」の具体化を目指す。</td></tr>
</table>

研究の内容	(1) 校内研究会を年５回行う。 (2) 提案授業、または、外部研修会に参加する。 (3) 週１回の研究推進委員会で研究内容や研究の重点について明確にし、それらを校内研修会で発信しながら共有化を図り、全職員の共通理解の下で研究を進めていく。また、研究の進捗状況を運営委員会で学習指導部長により共有する。 (4) 教科部会を週１回時間割の中に組み込む。教科部会で研究主題に迫る授業構想や指導案の検討を行う。 (5) 教科の枠にとらわれず授業を参観する「教員相互の授業参観」を行い、参観の視点に沿って参観カードを記入し、授業者にフィードバックすることで授業者と参観者の授業改善に取り組む。
研究の重点と実践	＝重点＝ 「深い学び」の具体化 ＝１年の校内授業研究を経て、各自が自分なりに考えた、生徒の具体の姿を語れるようにする。 ＝実践＝ ・「チーム教科（教科部会を基にした)」「チーム横断（教科や経験年数を横断した)」を編成し、各自が２つのチームに所属し校内授業研究会の中で交流することで、多面的に「深い学び」を捉える。 １,「深い学びの生徒の姿って、こうなんじゃない？（チーム教科で具体化する)」 →　指導要領にある各教科の深い学びを、実際の授業中の生徒の姿で具体化する。 ２,「そのために思考をつなげる手立ては？（チーム教科とチーム横断で具体)」 →　例：《学習の見通し》《対話》《共有》《まとめや振り返り》など。 ・提案授業、又は、外部研修会への参加どちらかを選択することで、各自が主体的に「深い学び」について研究する。さらに、個で学んだことをチームで共有することで、さらに内容を深めたり整理したりする。(交流会、事前研究会や事後研究会等) ・年度末、研究紀要にまとめる。
研究の計画	１学期　・今年度の研究の方向性、研究計画について検討 ・第１回校内授業研修会「研究概要」（４月） ・第２回校内授業研修会（５月） ・七中校区合同授業研修会（６月） ・第１回生徒対象アンケートの実施と結果の分析 ２学期　・第３回校内授業研究会（９月） ・第４回校内授業研究会（１１月） ・【教員相互の授業参観】 ・【提案授業・外部研修】 ３学期　・【教員相互の授業参観】 ・【提案授業・外部研修】 ・第２回生徒対象アンケートの実施と結果の分析 ・第５回校内授業研究会（２月） ・研究紀要作成

＜様式＞

学校名	山形市立第八中学校 山形市村木沢字河原田 1620 番地の２ TEL　023－643－2241 FAX　023－645－8496	校　長	畔上　　大
		研究主任	高橋　永子
研究主題	「自立した学習者」を育てるために（４年次） ～自分の可能性を広げる学びへの挑戦～		
研究主題設定の理由	本校は「創造・貢献・自立　～地域と繋がり、新しい時代を拓くたくましい生徒を育てる学校～」を教育目標に掲げ、「自ら学び、考え、表現できる生徒　自他のいのちを敬い、地域に貢献できる生徒　向上心にあふれ、主体的に行動できる生徒」を目指して、教育活動を行っている。その目指すところは、文部科学省中央教育審議会の答申（令和３年１月）、「『令和の日本型教育』の構築を目指して　～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」にある理念に通じている。 先の答申では急激に変化する時代の中で、先行き不透明な「予測困難な時代」にたくましく生きていくために、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが必要」としている。 本校の生徒は、明るく素直で、与えられた場面・状況において一生懸命取り組むことができる。一方で、課題を見つけたり、改善方法を考えたりする力は、十分に身に付いているとは言いがたい現状であった。そこで、生徒一人一人を「自立した学習者」に育てることを目指した教育実践を通し、豊かな人生を切り拓くことのできる生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。 これまでの３年間の取り組みによって、授業の中で非認知能力を高めることを意識した授業づくりを目指してきた。令和７年度のアンケートでは、生徒自らが自身の学習状況や、学習に向かう姿勢を振り返り、「見通す力」「やり抜く力」「コミュニケーション力」を伸ばそうと取り組み、「自己肯定感」「向上心」「協調性」がぐんと伸びる結果となった。 ４年次は、現状に沿った単元全体をデザインし、教師と生徒で共有してひとり一人が自分の可能性を広げる学びへの挑戦ができる授業づくり・システムづくりをすすめたい。		
研究の目標	以下に示す生徒の育成を目指し、研究を進める。 １　単元全体や本時で学習することは何かを把握し、どのような方法を用いればその課題を達成することができるのかを考え、見通しをもつことができる生徒。 ２　自分で立てた計画や方法に沿って、粘り強く課題に取り組むことができる生徒。 ３　取り組みの結果、課題を達成できたのかどうか、また自分の取り組み方は課題達成に向いていたのかどうかを振り返り、成果と課題を明確にした上で、次の学習課題に生かすことができる生徒。		

研究の内容	1　「学びの輪」を活用した単元構想 （1）視覚化 「見通し」「行動」「振り返り」の３つの過程を意識させるために図に表し、教室掲示する。 （2）生徒と共有 授業者のみならず、生徒も「学びの輪」のサイクルを回せるように意識した単元全体の構想をデザインする。 （3）単元を貫く課題設定 その単元でつけたい力を生徒が見通すことができる時間、個別最適な学び・協働的な学びを意識した学習活動を十分に行うための時間、振り返りを生かし次の単元につなげる時間の設定ができるよう、単元計画を工夫し、「学びの輪」を回せるようにする授業での活用 2　各教科における目指す姿を具体化する 「自立した学習者」の姿とはどのような姿なのかを、教科ごとに明確にする。また「見通す」「行動する」「振り返る」の３つの場面、それぞれにおいても、目指すべき姿を具体的に示し、生徒と共有する。 3　フォーサイト手帳の活用と学び方の選択 （1）単元テストの日程をフォーサイトに記入し、いつ、何を、どのように勉強するのかの見通しを持たせる。 （2）終わりの会で、フォーサイト手帳を記入する時間を設定し、その日の見通しを持たせる。 （3）単元テストや学習課題への取り組みを振り返り、ひとり一人がより良い学びを選択して、自分の可能性を広げる学びに挑戦できるようにする。
研究の方法	1　全職員の共通理解のもと、研究を進める。研究推進委員会を中心として提案し、職員ミーティング（八中カフェ）を行う。小規模校だからこその強みを生かし、生徒の実態や研究の目標について語り合う場を定期的に設定する。 2　外部講師を招いての研修会を行い、研究に対する学びを深める。 3　年２回の授業研究会を行い、事前研・事後研を通し、研究の深化を図る。 4　生徒に学習と非認知能力（S2）に関するアンケートを行い、研究の成果と課題を客観的に把握し、授業改善に役立てる。
研究の計画	４月　研究方針の確認 ５月　重点単元の決定・単元構想の作成 ６月　第１回　校内授業研究会 ９月　第２回　校内授業研究会、研修会（外部講師を招いて） ９～１１月　一人一授業の実施 １１月　学習と非認知能力（S2）に関するアンケート １２～３月　今年度の成果と課題の確認、次年度の研究の方向確認、研究集録作成

＜様式＞

学校名	山形市立第九中学校 山形市大字津金沢字中谷地６５７番地 TEL　６８８－２２２０　　FAX　６８８－９０４５	校　長	土井　正路
		研究主任	金原　幹子

研究主題	関わり合いを通して 自らを見つめ直し成長する生徒の育成（三年次） ～授業における ICT の効果的な利活用～

研究主題設定の理由

（１）昨年度までの研究から

昨年度まで２年間「関わり合いを通して自らを見つめ直し成長する生徒の育成」の研究主題のもと、「関わり」と「粘り強さ」に重きを置き、目指す生徒として取り組んできた。「関わり」と「粘り強さ」については３年前の生徒へのアンケートと教員のふり返りから、生徒と教員に共通する部分として抽出した。この目指す生徒像である「関わり」と「粘り強さ」には相関関係があると考えている。関わりを通して自分自身の考えや価値観をさらに深められ、他者との関わりの中で粘り強さが高まり、さらに関わりを重ねることで関係も築き深められるのだと考えた。

この具体的な姿が授業内で見られることを目標にして今年度も取り組んでいきたい。

「関わり」
①誰にでも「わからない」ことを伝え、助けを求められる生徒
②誰に対しても目を配り、助けることができる生徒
③関わりを通して、学び合える、教え合える、高め合える生徒
④関わりを通して、自分自身の考えや価値観を見つめ直すことができる生徒
「粘り強さ」
①わからないことを自分から訊き、わかろうとする生徒
②相手にわかってもらえるように、説明する生徒
③課題解決に向けて、あきらめずに取り組める生徒
④自分の弱点を見つめて、何度も解き直し、復習重ねる生徒

「関わり」を持つための有効な手段として、ICT を利活用していく。自らの考えを整理し、他者の考えを共有させたり、発表したりする手段として、大いに役立つものと考えられる。また、板書の文字や図表などを書き写すことが苦手な生徒にとっても、ICT を利活用することで、「粘り強く」取り組める状況を作ることもできると考えた。

研究の

上記のめざす生徒像でも「関わり」の４つの姿は表出しやすいため教員が生徒の成長を見取ることができる、集団で学ぶ良さを生徒自身が実感できる、という２つの理由から、今年度も特に「関わり」に重きを置く。「関わり」の生徒像を実現させるために、めざすゴール（生徒像）を明確にし、そのための手立てについては各教科で工夫できるようにしたいと考えた。教科部会を中心に授業づくりと授業改善を行うことで、教科で授業をつくる認識を大切にしていきたい。

目標	また、昨年度の課題点として、生徒会の学芸委員会の取り組みの一つである“教え合いキャンペーン”では、「関わっている途中で私語に変わってしまう」、「教えてもらうことを待っていて、自分から関わりに行きにくい人がいる」、「近くの人ではなく、遠くの人に関わりに行く人がいる」などがあがっている。これらの課題点については、本校の生徒は大変一生懸命にキャンペーンに取り組むので、関わることが得意な生徒がたくさんの声をかけることで解決しようと努力している。しかし、教員の教科ごとの振り返りでも「周りの人と交流できない人がいる」、「交流が聞くだけになり、考えの深まりにつながらない」、「意見を話す人の偏りが見られる」、「基礎学力がついていないため、何がわからないのかを理解できず、助けをもとめることができない生徒もいる」などの課題点があげられた。 また、関われるための、関係づくりを日頃の学級指導の中でも行うこと、確かな学力が定着するように指導することも必要だと考える。関わり合いの中で、主体性がより磨かれたり、理解力や応用力をさらに高めていけたりすることで、最後は自分自身を見つめ直すことができる生徒を育成したい。 今年度も、昨年度に引き続き授業内で生徒同士が関われる時間を意識的に組んでいく。それと共に、関わるだけで終わらず、そこから広げたり、深めたり、高めたりできるように支援していくための一つの手段として、ICT を利活用し、より幅広い生徒同士の関わり、意見を持っていても発言が難しい生徒の意見を取り上げる機会が増えることも期待できると考えた。
研究の内容	今年度は以下のように研究を推進する。 学習指導案：「学校研究との関わり」の項目にめざす生徒像に近づくための手立てを記入する。 「本時の指導」の右側の欄に「関わり③」などと記載し、授業内での教員のねらいを明確にする。 授業の中で、積極的に ICT の活用に取り組んでいく。 事後研究会：めざす生徒像に近づけていたかと、参観者の先生方に見ていただきたい場面について、授業の中での ICT の利活用は有効であったかを、授業中の生徒の具体的な姿を取り上げながら話し合うことで分科会を行う。
研究の方法	（１）授業実践の蓄積 一人一授業：全員学習指導案を書くことで授業改善を目指す。 ①指導主事等を招聘する授業研究会を年１回実施する。授業者は３名を予定。 ②それ以外の教員は、週に１回、時間割に組み込まれる教科部会で、授業を提供し、同じ教科の先生やその時間が空いている先生同士で参観する。翌週の教科部会で事後研を行い、授業改善を図る。学習指導案では評価のバランスや B 評価の生徒の具体的な姿をイメージすることを大切にする。 （２）事後研による振り返り めざす生徒像にせまれていたか振り返り、日々の授業に活かす。
研究の	５／２５（月）職員会議（今年度の研究についての提案） ９／１６（木）校内授業研究会及び、ICT 利活用に関する研修 ～２学期末　授業実践「一人一授業」提案終了 ⇒各教科から成果と課題の提出 １月下旬　研究推進委員会

計画		⇒各教科の成果と課題を受け、来年度の学校研究の検討
	３月上旬	来年度の学校研究の方向性決定
		⇒研究推進委員会で検討。来年度の４月の職員会議で提案できるよう準備を進める

＜様式＞

学校名	山形市立第十中学校 山形市若宮１丁目 10-12 TEL 632－1236　　FAX 645－8315	校　長	髙　橋　　修
		研究主任	石　川　安　江

研究主題	「『ゴール』を見据えてチャレンジし続ける生徒の育成」（３年次） ～意欲と見通しを持って学び合う姿を目指して～
研究主題設定の理由	本校の教育目標は「変化する時代を生きぬく、優しさと逞しさを持つ生徒の育成」である。その目標に向け、「自他を尊重し、主体的に考え、行動できる生徒（＝優しさ）」、「学びを生かし、夢や目標に向かって挑戦する生徒（＝逞しさ）」を目指す生徒像として捉え直し、本主題を設定した。 昨年度は、「問いを引き出す学習課題設定の工夫」、「伝える力を育む学び合いの工夫」、「自己調整力を育む単元計画の工夫」の３点を研究の柱として設定し、それに基づいて研究を進めた。特に「自己調整を育む単元計画の工夫」に重点を置き、単元計画に評価基準と振り返り記載欄を設けた「単元シート」の活用を提案した。単元のはじめに、生徒が学習のゴールを把握し、学習過程の中で自分の位置を確認できるようにすることで、学びの循環を意識した授業改善を図ってきた。その結果、生徒対象の学習アンケートの結果において、「単元を通して、どのような力を身につけるのかを理解しながら進めることができた」という項目において改善が見られた。 一方で、振り返りシートの活用方法や、振り返りをもとに自分の考えを再構築していく過程に課題が見られた。また、生徒の実態として、基礎学力や学びに向かう意欲にばらつきが感じられた。さらに、生徒対象の学習アンケートでは、「発表」に関する項目がやや低い結果となり、表現力や対話的な学びの質を高める必要性も明確になった。 これらの課題を踏まえ、研究３年目となる今年度は、これまでの取り組みをさらに発展させ、生徒の学びをより主体的で深いものに改善していきたい。具体的には、生徒の意欲と問いを引き出す課題設定を行い、単元の導入で「学びたい」という意欲を喚起することを目指す。また、各教科で習得した知識・技能を実際に使いこなせるレベルまで確実に高められるような学習場面を意図的に設定していく。さらに、単元計画と振り返りの在り方を再検討し、学びの見通しと振り返りが結びつくような仕組みを整えていき、生徒が自分の学びをその都度調整できるようにしていきたい。 以上のことから、本年度は、「意欲と問いを引き出す課題設定の工夫」、「対話を通して考えを深め表現力を高める工夫」、「学びの見通しを持ち、自己調整を促す振り返りの工夫」の３点を重点とした。生徒自身が問い立て、ゴールを見据えて学習の見通しを持ち、対話を通して学びを深めながら、自分の考えを再構築して学び続ける姿を目指して本研究を進め、本研究主題の総括としたい。
研究の目標	（１）生徒が自らの学ぶ意欲をもとに問いを立て、課題解決に必要な情報を集めて整理し、次の問いや学びの方向性を生み出していく力を育成する。 （２）対話を通して考えを深め、自分の考えを再構築するとともに、習得した知識・技能を活用して自分の考えを伝える力を育成する。 （３）学びの見通しを持ち、振り返りを通して自らの学びを調整し、次の学びへと生かしていく力を育成する。

研究の内容	（１）意欲と問いを引き出す課題設定の工夫【課題設定】 ・生徒が「知りたい」「調べたい」と感じ、学ぶ意欲と見通しを持てる学習課題を設定する。 ・課題解決に必要な情報を自ら集め、整理しながら自問自答を通して問いを深めていく場面を設定する。 ・整理した情報をもとに、次の問いや学びの方向性を生み出す。 （２）対話を通して考えを深め表現力を高める工夫【協働の学び】 ・根拠や思考過程を可視化しながら、一人ひとりが自分の考えを深め、生きて働く「確かな知識」の習得と各教科の資質・能力を育成する学習場面を設定する。 ・他者の考えに触れることで視野を広げて自分の考えを再構築していくとともに、情報共有を通して必然的な対話が生まれる学習環境を整える。 ・習得した知識・技能を、発表や記述などの表現活動において活用できるよう工夫し、学んだ内容を自分の言葉で伝えられるようにする。 ・ＩＣＴ機器を活用して情報活用能力を向上させるとともに、個別最適な学びと協働的な学びを通して、多様な生徒が誰一人取り残されない学びを実現する。 （３）学びの見通しを持ち、自己調整を促す振り返りの工夫【学びの循環】 ・単元目標と、単元における資質・能力を生徒と共有し、学びへの見通しを持つ。 ・評価規準をもとに、生徒が自らの学びを調整し、次の学びへつながる改善を行えるよう単元計画と評価を連動させる。 ・振り返りを通して、生徒が学びの意味や価値を捉えられるよう支援する。
研究の方法	（１）各教科部会において「教科目標」を見直し、今年度の主題・副題に迫る取り組みを示す。 （２）個人研究として、選択したテーマに沿って自分の課題を設定し、研究を進める。 （３）教職員全体が３つのテーマ「問いを生む課題づくり」「対話で深める学び」「見通しと振り返りのデザイン」に分かれ、話し合いを重ねながら研究を深めていく。 （４）授業研究会では、各テーマの代表者（各グループから１～２名）が授業を行う。 （５）ICT 機器の積極的な利活用を推進し、その活用状況を適宜記録する。（職員室「校内研究コーナー」での紹介等）また、ICT 活用に長けた教員が実践例を紹介し、教科の枠を超えて全ての教員が授業の中で ICT 機器を効果的に活用できる機会を確保する。 （６）年２回の学習アンケートを実施し、生徒の学びの変容を把握するとともに、成果と課題を明らかにする。
研究の計画	４月　校内研修会①（研究の概要について） ５・６月　教科部会（教科目標・振り返りシートの検討） ７月　第１回校内研究会【テーマ別交流会】・ICT 研修会 第１回学習アンケート １１月　第２回校内研究会【授業研究会】 １２月　教科部会にて、校内研究のまとめ 第２回学習アンケート １・２月　研究推進委員会にて今年度の成果と課題のまとめ 個人研究のまとめ ３月　研究紀要によるまとめ・次年度へ向けて研究構想の検討

＜様式＞

学校名	山形市立金井中学校 山形市陣場３丁目１２－２５ TEL６８１－８４７４　FAX６８４－６６２４	校　長	山田　博志
		研究主任	丸子　尚志
研究主題	生徒の問いを引き出し、考え抜く生徒の育成 ～ICT を効果的に利活用する授業づくりを目指して～（２年次）		
研究主題設定の理由	本校では金井中教育目標を「貢献　自立」と定め、「社会に役立つ力」「自分らしく生きる力」を育み、「貢献する、自立した人」を目指して日々の教育に取り組んでいる。 昨年度より、研究主題を「生徒の問いを引き出し、考え抜く生徒の育成～ICT を効果的に利活用する授業づくりを目指して～」と設定し、山形市教育委員会の研究委嘱を受け、金井中教育目標達成のための手段の中核を授業ととらえ、日々の授業改善に取り組んできた。成果としては次のことが挙げられる。 ・授業におけるデジタル振り返りの活用が各教科で進んだ。どんな振り返りが有効なのか、振り返りの視点を各教科で検討し、それをもとに授業で実践することができた。 ・ICT を活用して、協働的な学びにつながる生徒同士の考えの共有や他者参照の実践を行うことができ、授業改善に一定の効果があった。 ・道徳の示範授業と講演を通して、教科書を活用した道徳の授業づくりの基礎を学ぶことができた。各学年、学級で教科書を活用し、価値項目を意識した道徳授業の実践ができた。また、板書計画についても意識を高め、板書記録を残すことで個々の課題を明確にすることができた。 一方で、各種調査、アンケートから金井中の今後に向けての課題として以下のことが浮かび上がってきた。 ・単元のゴールや見通しを意識して授業を行うこと。 ・学習の中で生まれる疑問や課題を生徒が進んで追究すること。 ・自分と違う意見について考えるのが楽しいと答える生徒の割合が低いこと。 ・目標に向けて粘り強く取り組む態度の向上、学びを整理し分かりやすく伝える力、対話力の充実。 ・家庭学習を充実させること。 ・自分の学習の改善につながる振り返りを行うこと。 ・学び方の一つとして ICT を利活用すること、ICT を授業の中で計画的に利活用すること。 総じて、研究主題に迫る授業づくり、そして金井中教育目標の達成はまだまだ道半ばであることから、昨年度の研究を引き継ぎつつも内容を精選して、より一層の授業改善を図り、研究主題と金井中教育目標の達成を目指した取り組みを継続することとした。		
研究の目標	・単元のゴールや見通しを生徒も教師も意識して授業を行い、主体的に学習に取り組めるようにする。 ・単元計画や課題を工夫し、学習の中で生まれる疑問や課題を生徒が進んで追究できるようにする。 ・ICT を利活用した協働的な学習を展開し、自分と違う意見について考えるのが楽しいと答える生徒の割合を増やし、より意欲的に授業に取り組めるようにする。 ・生徒が自分の学習改善につながる振り返りを行い、自己調整力を身に付けることができるようにする。 ・生徒が自分に合った学び方の一つとして、ICT を利活用することができるようにする。 ・つけたい力を意識した授業を行い、目標に向けて粘り強く取り組む態度を向上させる。学びを整理し分かりやすく伝えるなど、対話の力を向上させる。 以上のことに関して、昨年度と同様のアンケートを今年度も実施し、質的な変化だけでなく、量的な変化も目指す。具体的には肯定的な回答結果が昨年度を上回り、おおむね 80%以上となることを目標とする。		

研究の内容	次の２つを研究の重点とする。 （１）研究主題を具現化する授業実践 （２）つけたい力を意識した授業づくり （１）について、具体的な授業改善の視点は次の通りとする ①生徒の問いを引き出し、生徒が考え抜く単元構成と授業の工夫 ②生徒が ICT を利活用して協働的に学ぶ工夫 ③生徒の自己調整力を育てる振り返りの工夫 ①について 学ぶ意義や有用性を実感できる単元構成と単元の課題の設定。 生徒と課題や単元計画を共有すること。毎時間単発の授業ではなく、単元を通してより大きな疑問や課題が解決されていくような単元構成とする。単元の課題と、単元計画を教師と生徒で共有し、生徒が学ぶことの必要感やモチベーションが持てるようにする。単元が開いて終わる（自分の中に疑問や課題が残る）終わり方、家庭学習でさらにその部分について調べてレポートを書いてくるなど、単元のオープンエンドも考えたい。 ②について （ｉ）他者参照を取り入れた授業づくり 他者参照を活用した授業づくりの推進。ICT を活用した協働的（対話的）な学びでは、共有と他者参照が有効であると考える。 （ⅱ）（ｉ）を推進するために、SKYMENU や Teams の積極活用 共有と他者参照を取り入れた授業づくりするうえで、ICT 機器とサービスを十分に活用する。 ③について ①、②の実践を通して、生徒の振り返りを「何を学んだか」から「どのように学んだか」へシフトチェンジする。振り返りを自己調整力に結び付ける。授業改善と振り返りは一体のものと考え、教員も生徒の振り返りをもとに授業を自己調整する。振り返りシートを継続して使用する。 （２）「つけたい力」について 金井中教育目標、金井中生徒の現状、研究主題との関わりから見直しを行い、つけたい力を「やりぬく力」「自己調整力」「協働する力」の３つに集約する。３つの力を意識した授業づくりを行う。それぞれ（１）の授業改善の視点①～③と関連する。
研究の方法	（１）週１回の研究推進委員会で協議し、それを全職員と共有しながら研究を行う。 （２）各教科における教科部会を通して、研究の重点に沿った授業実践について随時検討し、実践する。 （３）校内研修会を通して研究テーマを生徒の姿でとらえ直し、研究が目指すところを明確にして校内での共通認識を図る。 （４）教科の枠組みを超えた授業研究会を実施し、授業の参観と検討会を行うことで、全教員を挙げて授業づくり、改善の一層の充実をはかる。 （５）必要に応じてＩＣＴの利活用に関する研修を行い、教師の資質向上を図る。 （６）年度末の生徒アンケート、職員アンケートから成果と課題を共有し、授業改善や次年度の研究につなげていく。

研究の計画	４月　６日（月）	第１回校内研修会（校内研究のオリエンテーション）
	４月２０日（月）	第２回校内研修会（講師：SKY 株式会社　ICT 利活用と研究テーマについて）
	７月２２日（水）	校内授業研究会（国語、数学、理科）
	夏季休業中	第３回校内研修会（研究テーマについて）
	１学期～２学期	各自校内研究の重点に沿った授業づくりの実践
	１１月～１２月	校内授業研究会（社会、英語、技能教科）
	１２月下旬	生徒学習アンケート、校内研究に関する教職員アンケート実施
	１月末	各教科で研究のまとめ作成、検討、完成
	２月初旬	第４回校内研修会（今年度の研究のまとめ（予定））
	３月初旬	研究紀要『研究と実践の記録　一つ心』発行

＜様式＞

学校名	山形市立高楯中学校 山形市大字中里 38 番地 TEL ６８６－６０２９　FAX ６８６－４１８５	校　長	石井　均
		研究主任	秋場　千幸
研究主題	よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成（４年次） ～アウトプット力の向上を目指して～		
研究主題設定の理由	1　学校教育目標から 本校では令和元年度より、「ふるさとを愛し、未来に向かって、明るくたくましく生きる情操豊かな人間の育成」を学校教育目標として掲げ、時代の変化と地域の期待に応える教育活動を行っている。校内研究では、令和５年度より「よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成　～ICT の効果的な活用を目指して～」を研究主題として設定し、「興味・関心」にかかわる授業づくりの核となる『深い学びに導く課題設定』、教科の本質となる「資質・能力」を活かす『深い学びに導くよりどころ』、最後に「学びに向かう力・人間性」を高めるための『学びに向かう力』の３つの視点を重点として研究を進めてきた。さらに令和７年度には、アウトプット力を高めることに焦点を当てることとし、村山教育事務所計画指導訪問での指導助言を活かしながら、２回の教育評価会議で、アウトプット力向上に向けた方策、指導についてブレインストーミング形式でのワークショップを行うことで研鑽を積んできた。これらの取り組みから、授業改善および生徒の変容の手ごたえを感じている。 2　生徒の実態から 本校の生徒は素直で前向きに取り組める生徒が多く、授業、生徒会活動、行事ともに仲間と協力しながら取り組んでいる。また、前年度までの研究を通して、アウトプットすることの意味やその効果について意識を高めてきている。 一方、授業におけるアウトプット力については、明確な姿が設定されていないことや教科による特性があることなどから、手探りで取り組んできた。また、様々な手法による成果を実感しながらも、アウトプット力をより高めていこうと挑戦する生徒が多いとはいえない。 3　今日的な課題から 現代は、グローバル化や情報化などが急速に進展する社会である。これからの社会で必要とされる「生きる力」を育むために、学習指導要領の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」や GIGA スクール構想でのデジタル端末の使用など授業改善が求められている。また「令和の日本型学校教育」では「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、子どもたちの可能性を引き出すことを目指している。 このような中で、アウトプットを重視することで、思考力・表現力を育成し、コミュニケーション能力や課題解決能力を養い、自己肯定感の向上を図り、「生きる力」を育むことができると考えられる。 これら３つの視点から判断し、本校での研究主題を『よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成～アウトプット力の向上を目指して～』（４年次）として定めた。		

研究の目標	授業にとどまらず、学校行事や生徒会、さらには社会に出てからも自分の考えを表現することができる生徒を育てることを目標とする。そのために今年度は授業に焦点を当て、アウトプットする姿を示し、そのために必要な知識や技能を身につけさせ、思考力・判断力・表現力を磨き、主体的に取り組む態度を養いながら、授業改善を通して生徒の変容を追究していく。
研究の内容	昨年度までの研究の実践である『深い学びに導く課題設定』、『深い学びに導くよりどころ』、『学びに向かう力』の３つを土台とし、以下の視点に沿った実践を共有することで授業改善に努めていく。 視点１　アウトプットの場面（発言、交流、表現等） 視点２　アウトプットの方法（話す、書く、ＩＣＴ活用等） 視点３　アウトプットによる深まりの確認 それぞれの視点をもって、「育てたい力」は以下の通りである。 視点１　アウトプットの場面（発言、交流、表現等） 覚えた知識を自分の言葉で説明したり、ノートにまとめたりすることで、知識を「生きて働く」確かなものにする力 視点２　アウトプットの方法（話す、書く、ＩＣＴ活用等） プレゼンテーション、レポート作成、話し合いなどを通じて、知識をどう使うか考え、自らの意見を形成・発信する力 視点３　アウトプットによる深まりの確認 振り返りや他者との協働を通じて、自分の学びを評価し、学習の調整をしたり、次の学習につなげたりするなど、学びを深めようとする力 これらの力を、①見通しをもった単元構想、②生徒が必要感や有用感をもって学びに取り組める魅力的な課題設定、③生徒の実態や学習内容に沿った学習形態の工夫、④アウトプットに適した学び合いの場面の設定、⑤学び合いを支える学級経営、⑥効果的な ICT の利活用、などを通して育成していく。
研究の方法	１　研究の視点１～３の中から１つ選択し、どの単元で研究を進めていくか設定する。その際、仮説を明記しておく。年度末の研究のまとめでは、単元の構想、指導計画と研究成果などを紀要に掲載する。 ２　年２回（６月、１０月）校内授業研を行う。校内授業研では、可能な限り助言者・研究協力者の先生から助言を得て、授業改善に努める。 ３　校内授業研は、教科グループの配置および人数を考慮してローテーションで実施する。 ※教員数が減ったこと、今後も減ることを考慮して、以下のように授業研担当のローテーションを組む。【理科・技家・英語】、【数学・社会・保健体育】、【国語・美術・音楽】を１セットとし、３年に１度授業研がまわってくるようにする。授業研の参観や事後研もこのグループで行う。 ４　校内授業研で授業をしない場合は小研を１２月までに行う。 ５　前期・後期に分けて授業参観ウィークを設定し、自由に授業参観をし、情報交換を行う。 ６　生徒に学習に関するアンケートを行い、研究の成果と課題を客観的に把握し、授業改善に役立てる。 ７　年１回、外部講師による校内研修会を開催する。

研究の計画	研究計画		
	月　日	会議等	内　容
	４月　２日（木） ４月　３日（金）	研究推進委員会①	・今年度の研究の方向性、研究計画の検討
	５月１８日（月）	研究推進委員会②	・校内授業研①の準備
	５月２０日（水）	学習アンケート①	・生徒の実態調査
	６月２９日（月）	校内授業研①	
	７月１３日（月） ～２４日（金）		・授業参観ウィーク①
	８月１８日（火）	研究推進委員会③	・校内授業研②の準備、校内研修会の検討
	１０月１９日（月）	研究推進委員会④	・校内授業研②の準備、校内研修会の検討
	１０月２２日（木）	校内授業研②	
	１０月２６日（月）	学習アンケート②	・生徒の実態調査
	１１月２０日（金）	研究推進委員会⑤	・教育課程検討、校内研修会の準備
	１２月１０日（木） ～２３日（水）		・授業参観ウィーク②
		校内研修会	・講師の招聘
	１２月１６日（水）	研究推進委員会⑥	・研究紀要について検討
	１２月２４日（木）	教育評価会議②	・研究紀要の編集についての提案
	１月１４日（木）	学習アンケート③	・生徒の実態調査
	２月１５日（月）	研究推進委員会⑦	・次年度の研究の内容と方法
	３月　１日（月）	職員会議⑦	・研究紀要発行

研究の計画

学校教育目標

ふるさとを愛し、
未来に向かって明るくたくましく生きる
情操豊かな生徒の育成

○課題が多い社会
○情報化、国際化、多様化する社会
○新学習指導要領

○教師の願い
○保護者・地域の願い
○本校の歴史と伝統
研究の経緯

本校生徒の実態

強　み

・明るく、素直であること
・授業に真面目に取り組むこと
・学び合いに意欲的に取り組むこと
・ICT を積極的に使用できること

弱　み

・課題を設定すること
・自分の考えに自信をもって発表すること
・自分の言葉で適切にまとめ、表現すること
・学びを深めようとすること

研 究 主 題

よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成

～アウトプット力の向上を目指して～

目指す生徒像

授業にとどまらず、学校行事や生徒会、さらには社会に出てからも自分の考えを表現することができる生徒

育てたい力

覚えた知識を自分の言葉で説明したり、ノートにまとめたりすることで、知識を「生きて働く」確かなものにする力

視点１

プレゼンテーション、レポート作成、話し合いなどを通じて、知識をどう使うか考え、自らの意見を形成・発信する力

視点２

振り返りや他者との協働を通じて、自分の学びを評価し、学習の調整をしたり、次の学習につなげたりするなど、学びを深めようとする力

視点３

各教科　特別の教科道徳　総合的な学習の時間　特別活動

視点１　アウトプットの場面
視点２　アウトプットの方法
視点３　アウトプットによる深まりの確認

単元構想　課題設定　学習形態　学び合い
学び合いを支える学級経営　ＩＣＴの活用

令和８年度研究概要

学校名	山形市立山寺小中学校 山形市大字山寺１６５０ ０２３－６９５－２０４４	校　長	武田　裕子
		研究主任	（小）神保幸恵 （中）後藤　岬
研究主題	自ら学び方を選択し、学びをつなぐ児童生徒の育成 ～主体性を育む授業デザイン～（１年次）		
研究主題設定の理由	本校は、複式学級・少人数・小中併設校という特色を生かし、３年間にわたり総合的な学習を中心に９年間を見通したカリキュラム・マネジメントの充実を図ってきた。昨年度は、子どもが自分の学びを表現したり、地域と協働したりする姿が増加するなど、主体的に学ぶ姿が着実に育ちつつある。 一方で、複式・少人数という環境は個別最適な学びを実現しやすい反面、学びが固定化しやすいこと、多様な考えに触れる機会が限定されること、学習の進め方を自ら調整しながら学ぶ力が育ちにくいことなどの課題も明らかになった。これらの課題の解決は、学習指導要領が重視する「主体的・対話的で深い学び」の実現において重要であり、次期学習指導要領ワーキンググループにおいても、学習者が自ら学習過程を構築しながら学ぶ「主体性」の育成が中心的なテーマとして位置づけられている。 以上を踏まえ、令和８年度の研究では、これまでの「カリキュラム・マネジメントの整備」から一歩進め、子どもが自ら学びを創り出し、主体的に学習過程を組み立てながら学ぶ力を育成するための『学び方そのものを育てる授業改善』を研究の中心に据えることとした。 「自ら学び方を選択する」とは、文部科学省が示す主体的な学びの概念に基づき、課題の発見、目標設定、学習方法の選択、対話・協働による学びの深化、振り返りと次の学びへの活用といった一連の学習プロセスを、学習者自身が主体的に構築していく姿を指す。 「学びをつなぐ」とは、昨年度までと同様に、各教科で培った学びを総合的な学習で発揮し、社会で通用する力へとつなげていくことを意味している。 また「主体性」とは、学習者が目標達成に向けて自らの思考・行動・感情を調整しながら学習を進める力であり、学習指導要領における「主体的に学習に取り組む態度」の基盤となる。次期学習指導要領においても、育成すべき重要な資質・能力として重視されている。 本研究では、特に学び方を選択する力【学び方の自己選択】 と、主体的に学びを振り返り次に生かす力【リフレクション】の育成に力を入れる。授業では、児童生徒が自らの学習活動を予見（見通し・目標設定）→遂行（方法の選択・調整）→省察（振り返り・改善）する場面を意図的に設定し、主体的に学ぶ姿を育てていく。 さらに、育てたい非認知能力である「自分を高める力」「多様性を認める力」「目標を持ち、挑戦する力」について教職員で共通認識をもち、子どもたちの成長を見取る力を高めていく。		
研究の目標	学校教育目標『郷土「山寺」を愛し、社会に役立つ人間の育成』 重点目標　「考える子ども」「助け合う子ども」「たくましい子ども」 育成する力「自分と向き合う力」「多様性を認める力」「目標に向かって挑戦する力」 日々の授業を通して、子どもが自ら学び続けるための「学び方」を身に付けることをめざす。		
研究の仮説	仮説１　学び方のスキルを明確にし、授業の中で意図的に育成すれば、子どもは自ら学びを調整し、主体的に学びに向かうようになる。【学び方の自己選択】 仮説２　自分の学び方や学びに向かう姿勢を適切に評価する力を育成すれば、子ども達は他の様々な活動においても自らの思考・行動・感情を調整し、自分に合った生き方ができるようになる。【リフレクション】		

研究の内容

（１）子どもの姿の共有と「学び方」の明確化

①育てたい非認知能力を踏まえた目指す子どもの姿を共通理解する

②学び方の実態を語り合い、育てたい学習スキルを共通理解する

（目標設定・情報収集・対話・協働・表現・振り返り）

③小中連携による学び方の継続性の確保

（２）学び方を育てる授業デザインの検証【学び方の自己選択】と【リフレクション】

学び方の自己選択

①個別最適な学びと協働的な学びをつなぐ授業改善[学習課題のデザイン]

②子どもが主体的に学びに向かう教室環境づくり（ICT 活用含）[学習環境のデザイン]

③子どもの主体性を尊重しながら学びをつくる授業改善[学習のファシリテート]

④子どもが自己評価、自己調整を適切に行うための工夫[リフレクション]

（３）地域探究を通した学びの実践

①学級カリキュラム・マネジメントによる学びの系統化

②小学校：1 日生活総合 DAY・中学校：Yamadera Welcoming Tour

③地域の方との協働による学びの深化

④実践を振り返り、学び方の改善につなげる

研究の方法（Ｒ８年度）

（１）子どもの姿の共有と「学び方」の明確化

①小中それぞれに設定した非認知能力の指標をもとにリフレクションを行う。月初めの週を「リフレクションウィーク」とし、児童生徒が自分自身について振り返る時間を設定する。発達段階に合わせて作成・実施し、客観的に振り返る力を付ける。（キャリアパスポートに入れ、成長の足跡を残す。）

（２）学び方を育てる授業デザインの検証【学び方の自己選択】と【リフレクション】

今年度は②[学習環境のデザイン]と④[リフレクション]に重点を置いて研究を進める。年間を通して、山形大学の森田智幸准教授にご指導をいただく。また、職員会議において実践紹介を行ったり互いの授業を参観し合う「授業力ブラッシュアップ大作戦」を行ったりして、組織としてよりよい授業づくりを推進できる風土を醸成する。

（３）地域探究を通した学びの実践

地域で活動し、大人と関わる時間や探究活動を経て児童生徒の力を発揮する場面を確保する。また、既習事項との関連を考えながら計画を立てさせたり振り返って関連に気づかせたりする場面を意識的に設定する。また、年間を通して学習の課程がわかる掲示を行う。

研究の計画

３年計画　１年次：[学習環境のデザイン]と[リフレクション]に重点を置いて研究

２年次：[学習課題のデザイン]と[リフレクション]に重点を置いて研究

３年次：[学習のファシリテート]と１、２年次の課題に重点を置いて研究

↓１年次の年間計画

時期	主なテーマ	取組内容
4～5 月	研究の基盤づくり	校内研①（研究主題共有）／実態調査
6～7 月	授業改善のスタート	ICT 活用／校内研②（授業参観強化週間） （学び方の授業デザインの検証）
8～9 月	探究準備・学び方の実践	プロセス指導／校外研修
10～11 月	探究活動の実施	（生活総合 DAY・Welcoming Tour） 校内研③（村山教育事務所計画訪問）
12～1 月	評価の在り方の検討	自己評価改善／見取り研修
2～3 月	成果まとめ	成果整理／変容分析／次年度課題／紀要作成

＜様式＞

学校名	山形市立蔵王第一中学校	校　長	三浦　浩子
		研究主任	黒田　吉彦

研究主題	対話を通して自分の考えを更新し、 よりよく表現できる生徒の育成(1年次)
研究主題設定の理由	本校では、これまでの校内研究において、「かかわる」「深める」「表現する」ことを重視し、生徒が他者とかかわりながら学びを深め、自分の考えを表現する力の育成に取り組んできた。その結果、生徒は自分の考えをもつことや言語化することに一定の力を身につけてきている。 一方で、対話が「意見を言い合う場」や「発表の場」にとどまり、他者の考えを受けて自分の思考を組み替え、よりよい考えへと更新していく学びにまで十分につながっていないという課題が見られた。 そこで本年度は、これまで培ってきた「かかわる → 深める → 表現する」という学びの土台の上に、「更新（既存の考えに新しい視点が加わり、より豊かで深い考えへと変容していくこと）」を研究の核として据える。 対話を通して考えが揺さぶられ、変化し、育てられていく学習過程を大切にすることで、変化を前向きに捉え、学び続ける生徒の育成を目指していく。
研究の目標	･他者との対話を通して、自分の考えを見直し、更新する力を育てる ･考えが変化することを前向きに捉え、学び続けようとする態度を養う ･更新された考えを、自分の言葉や方法で適切に表現できる力を育成する
目指す生徒の姿	対話を通して自分の考えを更新し、よりよく表現できる生徒 （１）他者との関わりの中で、自分の考えを揺さぶり、育てていける生徒 ･他者の意見を受け止め、自分とは異なる考え方に気付ける ･対話の前後で、自分の考えの変化を自覚できる ･必要に応じて、自分の考えを組み替え直すことができる （２）変化を前向きに捉え、学び続けようとする生徒 ･考えが変わることを「失敗」ではなく「成長」として捉えられる ･新しい視点に出会うことを楽しみ、意欲的に学びに向かえる ･学び続けることに価値を見出している （３）更新された考えを、自分の言葉や方法で表現できる生徒

	･対話で得た気づきや視点を、自分なりに整理できる ･文章・発表・図・作品など、内容に応じた方法で表現できる ･表現を通して、次の学びや新たな問いにつなげられる
研究の内容・方法	本校では、学校全体で共通の研究主題を設定した上で、教科や生徒の実態、教師の専門性に応じて、以下の三つのアプローチから研究を進める。 ＜三つの研究アプローチ＞ ① 考えをつくる道　― 思考の生成・根拠形成・更新 ― ･主張→根拠→比較→再主張の流れを意識した授業構成 ･対話の前後での思考の変化（Before／After）の可視化 ･事実・データ・経験・反例などを根拠とした思考活動の充実 ② 安心して学びに関われる場をつくる道　― 心理的安全・関係づくり・参加の保障 ― ･発言しやすい雰囲気づくりと学習集団づくり ･「書く→ペア→全体」など、参加を段階化した学習構造 ･多様な参加方法を用意し、全員が学びに関われる授業 ③ 多様な学び方を支える道　― 多様性・UDL・インクルーシブ ― ･語彙・手順・ゴールの可視化による認知的支援 ･スモールステップや役割分担による行動面の支援 ･誰一人取り残さない学びのデザイン
評価の視点	以下の共通指標を用いて、生徒の学びを見取り、授業改善につなげる。 ･P（Participation：参加）どの生徒が、どのような方法で学びに関われたか ･U（Update：更新）対話により、考えがどのように変容したか ･E（Evidence：根拠）考えを支える根拠をもっているか ･B（Belonging：安心）心理的安全や所属感が保たれているか
年間計画	･４月　校内研修会①（研究方針の提案・共通理解） ･５月　校内研修会②（各アプローチでの協議） ･６～７月　各アプローチでの授業実践 ･９月　校内授業研究会 ･１０～１月　一人一授業の実践 ･２月　校内研修会（研究のまとめ）
研究目指すと姿して	･対話が「意見交換」ではなく「考えを育てる営み」として機能している ･生徒が考えの変化を前向きに捉え、学び続けている ･教師が共通の視点をもって授業を語り合い、改善している

学校名	山形市立蔵王第三小・蔵王第二中学校 山形市蔵王温泉字丈二田727番地 TEL694－9042　FAX694－9373	校　長	稲葉　健一
		研究主任	武田　俊紀 村山　隆太

研究主題

蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成

～地域の人・もの・こととかかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～

＜2年次＞

研究主題設定の理由

本校は小中併設の極小規模校であり、児童生徒一人一人の実態や思いを丁寧に捉えながら教育活動を展開できるという強みをもつ。一方で、多様な価値観に触れる機会や人間関係の広がりが限られやすく、主体的に課題を見いだし、他者と協働しながら解決していく力を意図的に育成する必要がある。こうした学校の特性と課題を踏まえ、本研究主題「蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成」を設定した。

本校が位置する蔵王地域は、温泉や樹氷をはじめとする豊かな自然環境と観光資源に恵まれており、地域そのものが学びの教材である。この地域資源を生かし、実社会とつながる探究的な学びを展開することは、児童生徒がふるさとに誇りと愛着をもちながら学ぶ上で極めて有効である。また、観光地である蔵王には国内外から多くの人々が訪れることから、地域課題を国際的な視点で捉えることが可能であり、グローバルな視野を育む契機にもなる。

そこで本研究では、「課題発見力」「調整力」「発信力」の三つの資質・能力を中核に据えた。児童生徒が地域の人・もの・こととかかわる中で問いを見いだし（課題発見力）、実現に向けて他者と交渉・協働しながら学びを進め（調整力）、自らの考えを適切に表現し発信する（発信力）という一連の学習過程を重視している。これらは、変化の激しい社会において主体的に生きるために不可欠な力であり、学校教育目標である「賢く　強く　たくましい児童生徒」の育成とも深く結び付くものである。

昨年度は、総合的な学習の時間を軸に教科横断的な学びを意識し、「総合を語る会」の実施などにより児童生徒の主体的な思いや願いを大切にした学習づくりを進めてきた。その結果、学年の発達段階に応じて地域との関わりを広げながら探究を深める姿が見られ、三つの資質・能力の育成に一定の手応えが得られた。一方で、学びの連続性や系統性の明確化、より多様な他者との関わりの創出といった課題も明らかになった。

以上のことから、本研究主題は本校の教育目標の実現に資するものであり、地域の特性と児童生徒の実態を踏まえたものである。2 年目においては、これまでの成果と課題を踏まえ、探究の質をさらに高めるとともに、資質・能力の育成をより一層確かなものとする教育実践の充実を図っていく必要がある。

研究の目標

学校教育目標　賢く　強く　たくましい　児童生徒の育成

建学の理念「含英」

「確かな学力の育成」「蔵王の未来を考える教育活動の充実」

めざす児童生徒の姿

- 蔵王の魅力を探究し、ふるさとを誇りに思う子ども
- 多様性を受け入れ、国際的な視野で未来を創造する子ども
- いのち輝く自他の存在を認め、自己実現に向けて挑戦する子ども

学校研究　蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成

～地域の人・もの・こととかかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～

感性を磨く体験・交流活動の推進

- 児童生徒の主体性を支援し、活動を共に探究する
- 多様な他者とかかわることで、協働的な学びを工夫する
- 生活科や総合的な学習の時間、各教科において、地域の素材を活かした学習材を発掘する

研究の内容

＜生活科・総合的な学習の推進＞

課題発見力 → 調整力 → 発信力

多様な他者と協働しながら、よりよい学びを生み出す

＜教科に生かす＞

身に付けた知識・技能を、教科と関連付ける

活用・ふり返り　磨きをかける

＜蔵王だからできること＞

地域学習材の発掘（人・もの・こと）

国際的視野　研修先と比較

未来の観光地　外部と連携

＜主体性を支える＞

個別最適な学び　支援の工夫

担任外・ALT の活用　ICT の活用

子ども主体の対話による学び

研究の方法

発信力

自らの考えを適切に表現し、発信する

調整力

「好き」を広げる
＝他者と交渉・協働しながら学びを進める

課題発見力

「好き」を見つける
＝児童生徒が地域の人・もの・こととかかわる中で、問いを見いだす

小中の校種を交えた「総合を語る会」
（児童生徒＆教職員）
・子どもたちの思い
・めざす姿
・何を、どのように学習するか

⇩

★児童生徒が主体となる伴走型支援
★児童生徒の学びの変容の可視化

研究の計画

期日・時期	内　　容
4月　3日	第1回研究推進委員会（今年度の研究について）
4月　27日	第1回校内研究会（今年度の研究について
6月　11日	第1回総合を語る会（児童生徒・教員）
7月　31日	第1回校内研修会（外部講師を招いた研修会を予定）
9月～10月	第2回総合を語る会（児童生徒・教員）
10月　22日	文化・学習発表会（山形市教育委員会委嘱研究校：公開日）
11月　27日	第2回研究推進委員会（研究のまとめについて）
12月　11日	第2回校内研究会（研究のまとめについて）
2月　15日	第3回研究推進委員会（次年度の研究構想・計画について）
3月　9日	第3回校内研究会（次年度の研究構想・計画について）

＜様式＞

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形大学附属中学校
山形市松波二丁目７番３号
TEL　641-4440　FAX　641-4441</td><td>校　長</td><td>加藤　咲子</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>矢作　創己</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">生徒が「学びの主体」となる授業の共創（３年次）</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">研究主題は、主に次の３点をもとに設定している。
①　学校教育目標の実現
本校の学校教育目標である「健康かつ明朗で、豊かな知性と誠実な社会性を持ち、自主的で実践力のある生徒を育てる」の実現を目指し、授業において目指す生徒の姿を生徒と教師が共有し、実践を積み重ねていく。
②　前研究の成果と課題
前研究では、研究主題「探究的な学びを通した資質・能力の育成」の下、生徒の確実かつ高度な資質・能力の育成を目指し、三年間の研究に取り組んできた。研究の成果として、教科の本質に迫る生徒の姿を具現化し手立てを明確にすること、単元等のまとまりを生徒にも意識させること、ICT機器を効果的に活用することなどによって確実かつ高度な資質・能力の発揮が見られたことが挙げられる。一方、課題として、教科等の枠を超えて長期的に資質・能力を育成していく視点や、学びに向かう力、人間性等について学校全体で共通の捉えをもって育成していく手立てが十分とは言えなかったことが挙げられる。
③　最近の教育の動向
最近の教育の動向として意識しているのは、OECD が進める Education2030 プロジェクトにおいて公表されたコンセプト・ノートと、中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」 において示されている内容である。コンセプト・ノートの中で、「VUCA」時代に必要な力として「エージェンシー（Agency）」が登場する。「エージェンシー」を発揮し、ウェルビーイングな未来を実現しようとする生徒の姿は、本校の目指す生徒の姿にもつながるものであると考える。また、中教審答申では、「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と、そのための教職員の姿として、「子ども一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者」となることが示されている。
以上のことを踏まえて、研究主題を設定した。</td></tr>
<tr><td>研究の目標</td><td colspan="3">本研究は、生徒が主語となり、教師は伴走者として生徒と共に授業づくりを行っていくことを通して、「学びの主体」となる生徒の実現を目指すものである。「学びの主体」とは、「よりよい社会の形成や高い自己実現を目指し、学習の目標・内容・方法を適切に自己調整し、粘り強さの原動力を基に試行錯誤し、教科等の本質に迫る考えや価値を生み出す姿」と捉えている。
本研究では、これまでの教師が「教える存在」として進める授業づくりの在り方の転換を目指している。従来、教師が行ってきた授業づくりに生徒も参画して、付けたい力やなりたい姿について対話を通じて協働的に設定していくとともに、その目標を実現するための学びの構築や実践のプロセスも生徒と教師が共に創り上げていく。教師は、生徒自身も捉えきれていない願いや学びを引き出したり高めたりする伴走者として、生徒の学びに寄り添っていく。
生徒が自ら目標を立て、試行錯誤しながら納得解を見いだしていく過程そのものを、多様な他者と共に創り上げていくことで、生徒が自らの人生や社会をよりよく変えていく力を育んでいけるようにする。</td></tr>
</table>

研究の内容	本研究では、以下の内容で目標の実現を図る。 **①　教科の本質に迫る教材開発と生徒が学習の目標・内容・方法を自己調整する場のデザイン** 前研究で目指してきた「探究的な学び」の実現を前提とし、生徒が授業をつくるために、教材がもつ教科等の本質を明らかにし、学習の目標・内容・方法を自己調整する場の設定及び自己調整を行わせるための多様な支援を行っていく。 **②　教科等の枠を超えて資質・能力を発揮する場としての総合的な学習の時間 LIVE の構築** 前研究から行ってきた「探究単元」の再構築を図り、生徒がよりよい社会の形成に向けて、多様な他者と協働し、課題解決を図る探究的な学びを行っていく。３学年時には、１・２学年時の学習を生かし、よりよい社会の実現に向けて個人やグループなどで具体的に様々なアクションを起こして社会とつながり，探究を進める活動を行っていく。 **③ 道徳授業のねらいの８類型に基づく道徳授業の提案** 「考え、議論する道徳」の授業を目指し、広い視野から多面的・多角的に考察できる「問い」について研究を進めていく。生徒が自らの道徳的な判断力や実践意欲を高めたり、心情や態度を養ったりしていくために、「道徳授業のねらいの８類型」に沿った「問い」を教師と生徒が協働的に設定し、道徳性を養う授業を行っていく。
研究の方法	本研究では、以下の方法で研究に取り組んでいく。 **① 学習指導研究協議会、授業研究会、校内研究会等の実施** **② 大学や各教育関係機関、地域社会等との連携** **③ 研究協力者の募集による県内各中学校との指導方法の共有** **④ 研究成果をまとめた「教育実践」の作成と発信** 検証は、授業実践後の事後研究会や教科部会で検討された内容の質的分析とアンケート調査の比較分析などの量的分析の双方によって行う。
研究の計画	**主な研究計画** 4 月 28 日　附属学校園合同研究交流会 5 月 21・22 日　学習指導研究協議会（全教科 1 授業提案） 7 月 25 日　総合的な学習の時間　一般授業公開 7 月 29 日　夏季校内研究会（最終年次に関する向けた方向性の共通理解） 9 月（予定）　全体授業研究会（最終年次研究に関する教科授業） 10 月～12 月頃　教科毎の授業研究会　※ 詳しい時期は教科毎に設定 1 月　校内研究会（次期研究主題の検討等） ※　研究成果や授業実践は、本校 HP で随時公開を予定している。 校内研究会は、年 10 回程度実施している。